

町民参加の町史づくり



竹富町歴史より

2014・3・31

第35号



竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11番地1
TEL (0980) 82-6191

目 次

『竹富町史』 第五巻 「新城島」 を発刊	1
書評特集	
『竹富町史 第五巻 新城島』	
・『竹富町史 第五巻 新城島』の発刊によせて 仲原 靖夫 2	
・伝承が支える島の歴史	
・島人の情熱と誇りの集大成 一 島の歴史	
・蘇つたバナリ文化 石川久美子 3	
・『竹富町史 第五巻 新城島』の出版を祝う 安里 英子 5	
・書評『竹富町史 第五巻 新城島』 上江洲儀正 6	
・書評『竹富町史 第五巻 新城島』	
・苦難を乗り越えた先人の知恵 赤嶺 政信 7	
・文化による島興し	
・『竹富町史 第五巻 新城島』の編集・発行によせて 得能 壽美 7	
・『竹富町史 第五巻 新城島』が語りかけるもの 川平 成雄 9	
・『写真にみるわが町』 31 終戦直後のマラリア撲滅 11	
第31回竹富町史編集委員会を開催	
業務日誌	
『文化財探訪』 26 仲盛の遠見台 15	
平成25年度受贈図書一覧 12	
竹富町史の刊行物 11	
編集後記	

●表紙の写真●

竹富町の一つの学校が1975年（昭和50）に姿を消した。新城島の上地島にあった町立上地小学校である。過疎化の荒波にもまれての廃校だった。

閉校時の児童数は4人。最後の校長になった伊良皆高庸は式辞で行政当局への怒りを吐露している。閉校式は、終業式と卒業式と同時に3月20日に行われ、学校は79年の歴史に終止符を打った。（竹富町教育委員会所蔵）

『竹富町史』第五卷「新城島」を発刊 —島の歴史・人と暮らしなどを網羅—



発刊した第五巻「新城島」

富島」編、第三巻「小浜島」編に続き、三番目の刊行に当たります。

発刊に向けては、平成十五年十月に「新城島」編専部会を発足させました。以後、島の出身者を中心し史料を駆使して、「手づくりの原稿」を執筆することを基本に作業を進めました。しかし、島は島嶼であるため残っている文献や史料は数が知れています。専門部会では石垣島の県立図書館八重山分館、沖縄本島の琉球大学図書館などから多くの史料、島の郷友会員から聞き取り調査を行うなどして、編集作業に当たりました。

竹富町史の島々編で第三弾となる第五巻「新城島」を、平成二十五年度事業として発刊しました。記者への発表の中で、第五巻専門部会長を務める登野原武編集委員長は「生まれ島に恩返しができてうれしい。新城島の歴史や文化などを総合的にまとめた本はこれまでなく、記録として後世に活用していくほし」と刊行を喜びました。

有人島九つ、無人島七つの島々を抱える「多島一町」の竹富町は、それぞれ島の個性を際立たせるため、町史編集事業で「島々編」を企画しています。「新城島」編は、第二巻「竹

—伝統文化・人物・歴史年表—と十六章に分けて構成しました。

その中で、第四章「パナリ焼とザン」と章立てを設けたことに本巻の特徴があります。新城島といえば、「パナリ焼」が最も知られています。執筆は島出身者を中心に、島にゆかりのある関係者十三人で担当しました。

「新城島」編はB五判で、巻頭カラー写真で八頁、本文七一〇頁。表紙には、新城島といえど、誰でも知っています有名な八重山の民謡にも歌われている「クイスバナ」の写真を取り込んだ、親しみやすい本巻になっています。

発刊について川満栄長町長は、「先人たちの労苦を次世代に引き継いでいくことはわれわれの大きな使命です」と述べ、また、町教育委員会の慶田盛安三教育長は、「島の人々からすると、親しみのある町史になっている」と発刊を喜びました。

竹富町史第五巻「新城島」は価格三二、二四〇円（税込み）。石垣市内、沖縄本島の書店で発売しています。

（通事孝作）

書評特集』『竹富町史 第五卷 新城島』

『竹富町史 第五卷 新城島』の発刊によせて

仲原 靖夫（仲原漢方クリニック院長）

このたび『竹富町史 新城島』が発刊されました。B五版七〇ページに及ぶ大冊で新城の地理、自然、歴史、教育、文化、産業、教育、医療・保健に至るまで、あらゆる分野にわたる情報が詳細にまとめられております。故郷を知る資料として大いに活用されるものと期待しております。パナリに生を受けた者の一人として町史を企画実行された登野原武委員長をはじめ関係各位に対し心から敬意を表し感謝申し上げます。

私は生後しばらく下地で祖母と暮らし、原風景はパナリにあると感じております。私が島を離れたあとしばらくして下地は廃村になります。島の行事は失われましたが、なぜか心は下地に戻っています。島を離れた多くの人々も島の記憶を心に秘め、それを支えに社会の荒波に耐え、乗り越えてこられたのではないかと、身近な先輩方の話を伺うたびに感じてきました。また先祖の命を引き継ぎ、今ある自分を見つめる時、パナリの事を具体的に知る事が己を知る助けになると感じております。この町史は失われつゝある記憶をよみがえらせる貴重な資料として今後多くの人に活用されることを祈ります。

本誌はパナリの地理、自然、歴史を俯瞰する形で構成されております。それぞれの時代の歴史を本土、沖縄、八重山と対比せながら新城の状況を紹介し、理解しやすいように工夫されております。しかも島の暮らしに関わるあらゆる分野について出典の明

らかな記録が集められているため、これまでまいりで断片的であつた記憶が具体的に詳細に確認できるようになっています。パナリに関する総合的な情報はこれ以上のものはないのではないかと門外漢ながら感じました。

下地出身者として第一の疑問はなぜ下地は廃村になつたかということでありました。島の地理的条件、地質学的な条件から農業の生産力は乏しく、交通の便、水事情も悪く、とても税金を穀物で納めるほどはなかつたため、ザンの肉が上納品となり、西表島に通つても米を作るようになつたパナリの状況が良く理解されます。パナリの唯一の利点はマラリアがなかつたことくらいのようです。小さい頃、祖母と畑に出かけた時の農具は籠だけでした。岩だらけの畑で思い切り耕せる土地は限られていたように記憶しておりますが、本書の資料により確認できました。そのような中でも牧畜、養蚕など生き残りをかけた様々な試みがなされたことも確認できました。

このような厳しい自然条件の中、島の人々はどのように生き抜いてこられたかということについても、改めて考えさせられました。島の神様に豊漁、豊作を祈り、富貴世、弥勒世の祈りが聴き届けられ、一年を無事に生きられたことの喜びと感謝をささげ、神を身近に感じながら、島が神に守られていることを、一年の行事を滞りなく行うことで実感したのだと思われました。その事が、人々に安らぎ、悦び、生きがいを与える、厳しい時代を生き抜く支えになつたのではないかと改めて思い至りました。プルのバンパジの夜は、祖母は一晩中イルワンで祷りを捧げておりました。あの真剣な祈りが島の人々の共通の想いであつたと今氣付かされます。ある年、家には誰もいなかつたので私も一緒にイルワンに連れて行かれ、今見れば一坪ほどの瓦葺の拝所の片隅の砂の上に寝

たことがあります。一晩中祈りを通した後、朝早く部落に戻りました。そのような島への思いも社会の変化の荒波には耐えられず、さまざま思いを秘めて島を離れたのではないかと考えさせられました。

そのほか小さいところから見聞きしたパナリの様々なことが具体的な資料で確認できます。家を作るために庭に保存されてあつた塩水で処理した後の材木のこと、不振だったカツオ漁の後祖父が台湾に出稼ぎに出たこと、戦争マラリアのこと、南風見田のこと、部落や学校の移転問題、癪病のことなど、身近に見聞きしたあらゆることを確認できます。ささやかなことですが、山で採つて食べたヤマスボーの実や、蔓になるユブズの実のことも植物名の中に見つけることができました。

自分の専門を通してパナリの事を確認できたことが一つあります。琉球王国尚灝王の御典医に渡嘉敷親雲上通寛があり、道光十三年（一八三一）に『御膳本草』を上覧しております。日常の食材の漢方的効能や食べ合わせの禁忌について記載されております。その中に海馬、儒艮の記載がありました。「氣味は甘温、毒はない。難産に用いてよい。かつ血氣の痛みを療し、腎の臓を温め、陽道（男子の生殖力）を壯んにし、積塊を消し、疗（多く顔部に生じ頗る危険なできもの）並びに腫れ物を治す。又難産の時之を身に帶び、或いは手に握つて産しやすい。甚だ効驗がある。」（一九六三年、編集発行人・當間清弘）適合する薬物は手に握るだけでも効果を發揮することが漢方では握薬として知られています。同じパナリでも廃村を免れ豊年祭やその他の島の行事が残されている上地について、先輩方の御苦勞に改めて敬意を表し、末長く継続される事を祈らずにはおれません。

伝承が支える島の歴史

—島人の情熱と誇りの集大成—

石川久美子（和光中学校非常勤講師）

「竹富町史」は①「通史編」②「島じま編」③「資料編」という特徴的な構成をとっている。竹富町は九つの有人島と七つの無人島からなり、それぞれが独自の歴史や文化をもつためである。その「島じま編」第五巻『新城島』が刊行された。『竹富島』、『小浜島』に続く待望の一冊である。それぞれの巻は基本的に同じ構成をもつが、特徴を序章と終章及び独自の章を立て、浮き立つようしている。新城島の場合、序章は「パナリ焼の里とザンの島」、終章は「リトルオアシスの新城島」となつており、パナリ焼とザンについては第四章で詳しく論じられている。

私が現在興味を持つているのは、伝承と歌謡である。歌謡も伝承されているものだから同じ「伝承」という括りに入るだろう。それはリアルな歴史がほしいからであり、むしろ伝承こそが歴史を語つていると考えているくらいである。したがつて私は「島じま編」各巻の「歴史と伝承」という章立てに特に関心を抱いた。その章立てが意味するのは、伝承も歴史を構成する一要素だということである。『竹富島』において狩俣恵一氏が述べているように、むしろ伝承から歴史を考えると新たな「歴史」が見えると考えられる。そしてそれは狩俣氏のいう「島の精神史を構築することになるだろう。

「歴史と伝承」は、本書では第三章にあたるが、全体を通してそのような性格が見られる。例えば下地の歴史は、統計資料と古

老野底宗吉氏の伝承によつてゐる。歌謡も取り入れられ、第三章では、西表島の木材で舟はもちろん、機織り機もつくったことが

『古見山ジラバ』によつて知られる。第四章「パナリ焼とザン」でも、ザンの捕獲の様子が『サントウルジラバ』によつて語られている。パナリ焼については、喜舎場永珣氏の『仲筋ぬヌベーマ節』註釈における「古老の伝承」が紹介されている。このように伝承が歴史を構成しうるさまを本書は見せてくれるのである。

このような「伝承」という視点を考えると、次のような問題も考へることができ。第七章「信仰と祭祀」において「白保家の拝所が雨乞いの村御嶽として承認された」ことが記されている。しかし家の拝所という個別的なものが、共同体の拝所になるには、その間を埋める「何か」がなければならぬ。その「何か」が「伝承」なのではないか。干ばつの際に白保家だけは水に困らなかつたというような伝承が思い浮かべられ、その消えた伝承を知りたいという気持ちが沸いてくるのである。

さらに同章には、生活態度を示す次のような伝承がある。「火の神の前で泣いたり怒つたりしてはならない」、「火の神の前で愚痴をこぼしたり、人の悪口をしてはならない」、「乱れ髪で火の神の前に出てはならない」。これらは「主婦の最高の信仰の対象」である「火の神」に対する心得である。私はこのような生活態度にこそ人の基本があると思つてゐる。しかし主婦は、弱みも見せられず、愚痴もこぼせない自分の境遇を嘆くかもしれない。本書にはこう書かれている。年末に「火の神が昇天して一年中一家に起つた事柄について天帝に報告するもの」と考えられており、翌年「その報告に対する報酬として吉報をもつて天降るといわれている」。このことは、先の心得が主婦にとって单なる節制や我慢ではなく、報いや救いになりうることを示唆している。要するに生

活態度を支えるのが「信仰」であり、「信仰」ゆえに救いにもなるということだつたのである。

そして第九章「民間伝承」は、「植物に関する民俗知識」と「ことわざ」から成つてゐる。前者に関しては、玉置和夫氏の、新城上地の植物を調査した成果である『沖縄の植物と民俗』をわかりやすく整理したものである。玉置氏は一九七八年、奄美の加計呂麻島で不慮の事故のため若くして亡くなつたが、日本の古代文学を沖縄の歌謡から見ることによつて新しい読みを拓いた、私の師である古橋信孝先生を新城島に誘つた人物でもある。本章で取り上げられたことによつて、植物民俗学の貴重な資料である氏の遺稿集『沖縄の植物と民俗』は、三十五年の時を経て日の目を見るこことになつた。本書によつて沖縄の植物と民俗を考えるきっかけにもなるに違ひない。

終章では「島は過疎化の波に翻弄」されたが、「島の祭祀となると、三〇〇～四〇〇人もの出身者が集い、先祖代々受け継がれて來た島の伝統文化を守つてゐる」とある。私は昨夏、島仲家の皆様にお世話になり、上地の豊年祭を見せていただいた。その際島の方々の祭りに対する情熱と誇りをひしひしと感じ、胸が熱くなつた。新城島は島の方々の島に対するそうした熱い想いによつてこそ新城島なのだ。そして今、本書『新城島』を読み、その情熱と誇りを同じように感じてゐる。

(編集係注： 石川さんは平成二六年四月より、日本学術振興会特別研究員として御研究を継続されます。)

蘇つたパナリ文化

—『竹富町史 第五卷 新城島』の出版を祝う—

安里英子（フリーランス・ライター）

竹富町史の『新城島』が上梓されました。七一〇ページという分厚い本です。すでに完成した『竹富島』や『小浜島』もそうですが、小さな島の大きな本には、島の歴史や文化、生業、暮らしぶりなどが満載され、人々の息づかいが伝わってきます。上地や下地の出身の方々にとっては、すでに亡くなられた懐かしい方々の話や、現役のおじさん、おばさんの話に心高ぶることでしょう。とりわけ下地出身の方々は、牧場建設で島の原風景が失われ、特別な感慨をお持ちのことと思います。

私はいわゆる「新城嫁」ですが、夫（精善）から断片的に聞いていた島の話が、本では具体的に知ることができます。ページをめくるごとに感動の連続です。

これまで「新城」といえば、パナリ焼きや、ザン（ジュゴン）、アカムタ・クロムタの祭りが有名でした。これを調査するために世界や日本の学者たちも訪れています。このたびの本ではそのことを、もつと深く知ることができます。私が特に関心をもつたのは、島の人々の日常の暮らしぶりです。たとえば小浜島では今でも、女性たちが機を織つて祭りにはそれを競つて着るという伝統がありますが、新城やその移住先である西表大原ではそれをみることができません。でもありました。かつて新城では、藍を植え、苧麻（ブー）、芭蕉、綿などを栽培し、蚕を養いそれを布にしていたのです。苧は白身苧（シルミブー）

とよばれ、御用布としても評判が高かつたそうです。苧麻は屋敷内で石垣に沿つて植えられていました。また屋敷内には黄櫨、椿、ヤラブなどを植え、蟬や髪油を自給まさにエコな暮らしをしていたのです。

さらに、海と向き合う暮らしもダイナミックです。島では五戸で一艘の割合で刳舟をもつっていました。刳舟の材料になる木は西表で調達しますが、詳しくは本に書いてありますのでお読み下さい。そのような技術があつたからこそ、ザンの漁も可能だつたのでしょう。また舟は魚をとるだけではなく、それに焼き物や布などを積んで島々間の民間交易を行つてきました。

さらに、さらに特筆すべきは、焼畑農業と粟の文化です。畑を焼いた後には、粟、麦、黍、豆、甘藷、胡麻を輪作します。「畑を焼いて最初に作る作物は粟である。常に秋の播種から始まる。これは農耕儀礼と関連しております。注目すべきことである」と書かれています。島の豊年祭は、はじめに粟の豊作を祝う（小豊年祭）ことからはじまり、稻の豊作を祝う（大豊年祭）で終わります。粟の豊年祭は地味ですが、私はそれに注目したいと思います。なぜなら、焼畑は台湾の原住民の間でも行われてきました。そこでは粟の文化が見られます。粟の酒や、饅頭、祝いのときには台所から粟の蒸す匂いがただよつてきました。これは台湾で私が直接見たわけではないのですが、「台湾原住民文学」の作品に描かれているものです。パナリでは祭りに粟の饅頭（おにぎり）を握ります。私は亡き義母や叔母さんたちと握りました。とても似ているな、と思うのです。

この焼畑農業と粟文化は沖縄本島北部にも見られますし、中国や日本の九州などでも見ることができます。島の目のように俯瞰して見ると、小さな島の文化が決して孤立したものではないこと

に気づきます。しかし、この文化に支えられたパナリ魂は、島の人でなければ分かち合えない独特のものがあるような気がします。祭りになると、遠く移住したそれぞれの地域から集まつてくるその思い。パナリ嫁とはいえ、とても立ち入ることのできない精神世界です。

なんと重たい本。とても片手では読めません。それだけ中身がつまっている証拠ですが、できたら、将来、子どもたちや、お年寄りにも気軽に読めるダイジェスト版ができると良いなと思います。島の出身者ではない多くの方々にも読んでいただきたい。そうすれば琉球の島々の文化の深さと多様さを知つていただけるのではないかでしょう。

書評『竹富町史 第五卷 新城島』

上江洲 儀 正（竹富町史編集委員）

竹富町から刊行された『竹富町史 第五卷 新城島』（二〇一三年、竹富町史編集委員会編）は、七〇〇頁あまりの一冊まるまる新城島についての本である。

表紙と背表紙に記された「新城島」の文字の下にあるのは、「新城島で一冊。どうだ驚いたか」というビックリマークではなく、じつは新城島の形。上の部分が上地、下の部分が下地、両島あわせて新城島、である。

一九六二年八月に下地島は廃村となつて、今では島全体が牧場となつた。『八重山手帳』によると、二〇一三年六月現在の新城島の人口は一八人（男一五人、女三人）である。

竹富町史編集事業は町政四〇周年を記念して一九九〇年にスタ

ート。これまで資料編、写真集などを刊行してきたが、一〇年前からは「島じま編」にも同時に取り組んできた。特徴ある竹富町の島々をそれぞれ一冊にまとめようというもので、『竹富島』（第二巻）、『小浜島』（第三巻）に次ぐ三冊目が『新城島』（第五巻）である。今後、鳩間島、波照間島、西表島、黒島とつづく予定。

二〇一三年一二月におこなわれた記者会見で、登野原武編集委員長（新城島出身で『新城島』編の専門部会長でもある）は、「新城島についてまとまつた文献がなかつたので、歴史を記録に残せて嬉しい」と喜んだ（『八重山日報』）。

一〇年という歳月を思う。じつは私も『新城島』編専門部会の委員のひとりで、思えば一〇年前に登野原専門部会長を中心にして、島のふたりの長老・野底宗吉さん（下地島）、西大舛高壱さん（上地島）、島仲信良元新城公民館長、安里碩八元竹富町史編集室長の六人で編集作業をスタートさせたのだつた。

この一〇年の間に、西大舛さんと島仲さんがお亡くなりになり、新たに安里功さん、安里精善さんが専門部会委員に加わつて作業はつづけられた。そして、このたびついに完成を見た。委員の変動などがありながらも完成できたのは事務局の頑張りが大きかつた。一九一七年（大正六）生まれ、去年（二〇一三年）カジマヤーを迎えられ、今は体調をくずして病院に入院されているという、野底宗吉さんはこの『新城島』をどういうお気持ちで手にしただろうと考えると、感慨深いものがある。

新城島の特徴は「パナリ焼」と「ザン（ジュゴン）」と「アカムタ女神」である。『新城島』では、「第四章 パナリ焼とザン」が特別に設けられ、島人の精神的支柱であるアカムタ女神についても許容される範囲で記述された。

また、玉置和夫氏（埼玉県生まれ）の論文をもとに書かれた「植

物に関する民俗知識」などは貴重で、「第一三章 人物」では多くの人が取り上げられた。生存者まで採用するのはどうかという意見もあつたが、「歴史を残せて嬉しい」という登野原委員長の思いは、次代につなぐという意味でも、新城人共通の思いであろう。『新城島』の完成を共に喜びたい。同時に、『新城島』をどうぞよろしく、と多くの人に訴えたい。そしてDTP作業で頑張つてきた南山舎のスタッフ（制作・南山舎なのです）にも「おつかれさま」と言いたい。

書評『竹富町史 第五卷 新城島』

—苦難乗り越えた先人の知恵—

赤嶺政信（琉球大学法文学部教授）

本書は、竹富町史の「島じま編」シリーズの一冊で、竹富島編・祭祀・交通・通信・情報・保健・衛生など全十六章から構成される七百頁余の大著であり、島の歴史をまるごと記録化するという

民俗学を専攻する評者にとって、三大行事とされる豊年祭、節祭、結願祭についての詳細な記述には学ぶべきものが多々あつた

文化による島興し

得能壽善

(法政大学沖縄文化研究所兼任所員)

二〇一三年十一月、竹富町町史編集委員会による『竹富町史』のいわゆる「島じま編」の、竹富島・小浜島に次ぐ三冊めとなる

る」神的存在でもあつたという指摘には刮目させられた。
通説して強く印象に残つたのは、島が歩んできた過酷ともいふべき歴史である。一七七一年の大津波による壊滅的な被害、水と農地に恵まれない島ゆえの近世以来の西表島に舟で通つての農業一九四〇年から始まる西表島の南風見開墾事業と戦争による頓挫戦後の南風見への集団移住、一九六三年と一九七一年の大干魃の時の苦難、一九六四年の下地島の廃村とそれにちなむ「神別れの御願」の実施など、それこそ枚挙に暇のないほどの苦難の歴史が記録されている。西表島を望む浜での海の彼方から豊穣を迎える祈願の際に、西表島の古見岳にかかる雲の状態によつて来年の豊作を占うことや、生後間もない赤子に石垣島の於茂登岳を見せるというウムトウミーは、島の苦難の歴史のなかから生みだされ、受け継がれてきた特徴的な習俗かと思われた。

本書に記された島の先人たちが苦難を乗り越えつつ歩んできた歴史と、そのなかで培かれてきた島で生きるための知恵が、新城島のみならず、多くの困難を抱える沖縄の島嶼社会にとって、未来を展望するための指針として活用されることを期待したい。

—『竹富町史 第五卷 新城島』の編集・発刊によせて—

(ジュゴン)についても、ザンの骨を祀る御嶽の存在が関心を引いたが、捕食対象であるザンが、一方では「海(航海安全)を司

『新城島』が発行された。『島じま編』の企画は、沖縄県のほか市町村による字誌（あざし）と同じものなのだが、陸続きの字ではなく島であることによって、竹富町史は独自性をみせることになった。

島の自然・歴史・文化と現在の生活を一冊にまとめるという企画は、執筆者をその島の関係者に求め、いわば島の総力をあげての編集が行なわれている。

本書の編集には、新城島専門部会がおかれ、竹富町史編集委員長である登野原武氏が委員長を務められた。多くの島の関係者が執筆にあたられているが、内輪話でうれしいのは、委員長の個人的なお祝い事や、大病をされた通事耕作さんの執筆箇所が本書のあちらこちらにあることだ。

本書は、タイトルなどでは、大きく新城島とされるが、内容では上地島・下地島の二つの島のそれぞれの個性を強調することが多い。住む人の実感としては、新城島は二つからなるのである。表紙の「新城島」の文字の下にあるのが上地・下地の地図などが、その形はまるで「新城島！」と、ピックリマークのようだ。

本書は七〇〇頁を超える大作で、その章立ては、序章「パナリ焼の里とザンの島」に始まり、島の概況、自然、歴史と伝承、パナリ焼とザン、教育、人と暮らし、信仰と祭祀、人生儀礼、民間伝承、交通・通信・情報、保健・衛生、伝統文化、人物、歴史年表の十四章および、終章「リトルオアシスの新城島」でくぐられる。ほかの「島じま編」と共通する章もあるが、本書では新城島の歴史を象徴するパナリ焼とザン（ジュゴン）が強調されている。

内容には、新しい研究成果をもりこむことは当然のことだが、その島が蓄積してきた知の大系への目配りを忘れていない。後者

の典型的な例が、本書はじまつすぐの「昔の気象学」にある（一八〇二〇頁）。大正六年上地島にお生まれになつた西大舛高壹氏の『南の島の物語』によつて、「風の名」「雨の名」「気象占い」が紹介されている。まさに島に生まれ、島を知りぬいた人が伝える島での生活における最重要事項である。

新しい研究の成果としては、「新城島の人口動態表」を例にすることができる（三九〇四七頁）。膨大な史資料を集め検討を加えたもので、島の人、一人ひとりが見えてくるような年表である。ただ、人口統計の数字は、過疎化によつてほとんど人が住まない島になつた事実をうつたえている。島の人々の責任ではなく、この国の歴史として、事実を受け止めなくてはならない。

「海岸と海」の上地・下地それぞれの「海への道と海岸」地図は、島の復元にとって貴重である。島は陸地だけではなく、海が生活の場として活かされていたのであり、その記憶をとどめた野底宗吉氏による地図をもとにしている。研究成果では、動植物の部分は最新というより最高の成果である。当然ながら、島は人類だけのものではなく、ヒトはこれらの自然と強くかかわって生きてきたのであるから、これは最も重要な民俗知識といえる。

「歴史と伝承」でも、例えば、科学的な最新の成果をもりこんだ考古において、安里武信氏の『新城島』や野底氏による記憶とのすりあわせが行なわれる。近世部分の多くは、その野底氏のインタビューをまとめた上江洲儀正氏が執筆しているが、これは歴史における新たな執筆者の発見となつていている。

近代以降は、一つの節を何名かによる執筆者が執筆している。明治・大正時代の歴史は、沖縄県や八重山の資料をはじめ、これまで『竹富町史』で刊行された「宮良當整日誌」や新聞集成、官報を駆使して解説されている。町史による最新の研究成果である。

昭和戦前期から、島人の名前が見える（顔が見える）叙述が多くなる。とりわけ、「アジア・太平洋戦争」における世帯別戦災実態と全戦没者の一覧表は（二一〇～二一六頁）、町史『戦争体験録』を参考に、まさに地元に密着した住民の戦争の記録である。ここでは、戦前に西表島南風見に移住した元島民もフォローしている。

第五章「教育」以下の各分野の記述では、新旧の成果はもとより、体験談がふんだんに活かされている。例えば、教育では先に紹介した野底氏をはじめ、新城校に赴任した竹原孫恭氏、亀川安兵衛氏の体験談である。なかでも、竹原氏の運動会の思い出は、「愉快」！（二八四～二八六頁）。

評者の興味でいえば、「生業」のうち「水稻通耕作」での西大舛氏への聞き書きの成果がある（三七二～三七三頁）。通耕そのものについての記述も重要なのだが、評者は最近八重山のイノシシ対策に関する小論をまとめた。その小論に、戦前、西表島での稻作の「半分はイノシシの餌であった」という証言を加えたかった。民俗に興味のある方には、「人と暮らし」「信仰と祭祀」「人生儀礼」「民間伝承」「伝統文化」といった章を見ていただきたい。これまで述べてきたような編集・執筆姿勢によつて、島を知り、今後の指標となるべき知恵がつまつてているといつてよい。

「人物」には、とくに『新城村頭の日誌』にみる新城島の人々」という項がある（六七九～六八四頁）。史料に見られる人々の名を確認するのは、重要な作業である。この日誌には多くの人が登場するので、このような発想が生まれ、その成果は十分なものである。さらに追加するならば、王府編纂の『球陽』や八重山土族の家譜などの史料にも、新城島の庶民の名があり、時代を超えた島の戸籍簿はもつと充実するはずだ。

終章「リトルオアシスの新城島」で、登野原氏は、「リトルオアシス計画の実現には、住民や出身者の愛郷心のみならず、島を再興しようとする今後の構えが重要になつてくるだろう。これは時代を背負う若者に未来を託す気持ちの表れでもある」という。島の総力をあげて編集された本書は、その成立から完成された内容まで、文化による島興しを実践したものということができる。島の先人に対しても、「時代を背負う若者」に対しても、また島外の我々に対しても、文化のオアシスとしてはビッグな新城島であることを、本書は証明している。

（『八重山日報』二〇一四年三月二七日掲載）

『竹富町史 第五巻 新城島』が語りかけるもの

川 平 成 雄（琉球大学法文学部教授）

竹富町は、竹富島・小浜島・新城島・黒島・鳩間島・波照間島・西表島から成る。「島じま編」は、『竹富町史』の中核として位置づけられており、これまで竹富島、小浜島を刊行し、今度の新城島である。

章別構成をみると、序章の「パナリ焼の里とザンの島」から始まつて、終章の「リトルオアシスの新城島」で結び、この中に、歴史と伝承、パナリ焼とザン、人と暮らし、信仰と祭祀、人生儀礼、民間伝承、伝統文化などの章を織り込むことで、人と島の持つ意味を探る。

人・生産・生活を軸に、新城島がどう描かれているのかをみると、人の動きは、近世資料および現代資料を丹念にひもとく中で迫

り、「新城島の人口動態表」には引き付けられる。

表から人の動きを追うと、島に住む人たちが初めて資料に登場するのは一六五一年の三三三人、その後、増加の傾向をみて、一七三七年には島の歴史の中で最高の七〇五人に達する。だが、一七七一年の「明和の大津波」で三四九人に減少する。以後、一〇〇年もの長い間にわたって人口資料がみられなかつたが、一八七二年の琉球藩設置時には一六八人であつた。

大正期に入ると、第一次大戦による日本経済の好況の余波を受けて一九一八年の四二三人となる。その後の動きをみれば、満州事変の勃発によつて敷かれた食料増産で、一九三三年には戦前期最高の五五五人となる。第二次大戦後の動きは、一九四八年の二八八人をピークに減少を続け、減少の波はやむことなく、二〇一二年には一五人となる。

このように、一六五一年から二〇一二年までの三六〇年にわたり島に住む人の動きを緻密に描き出したことは、特筆に値する。

生産はどうであつたか。首里王府は、島津侵入二年後の一六年検地で、八重山の石高を五九八〇石と定め、一六三五年の盛増で六六三〇石とする。一六三七年には人頭税制を断行、加えて特産物生産地の再編を図り、宮古・八重山へ「布」の生産を集中させ徹底した納稅収集方法をとる。市場経済が未発達の当時にあつて、税徵収の対象はいきおい農業に向けられ、百姓は納稅に呻吟する。また農業生産を維持して税を徵收する必要から村建てを行ひ、強制的な移住政策をも採る。

このような人頭税制下の中では、島の人たちは、どのような生産を営んでいたのか。興味を引くのは、一八九二年の生産高調査である。田地一三町六反、畑地三九町九反で、米は九六石、粟は五四石、甘藷（イモ）は二七万斤余である。島には田がないので

賦課された田地分は西表島に「通耕」して米を作つた。染めの原料である藍が一〇一三斤、そして布は苧麻布が二一反、木綿布が一四二反、芭蕉布が一八〇反であつた。生産は納稅のための生産であり、百姓は「納稅奴隸」に等しい存在でしかなかつた。しかも、唯一、ザン（ジユゴン）の捕獲が許されていた島であつたが、肉は王府への献上物であつた。

生活はどうか。衣は苧麻・芭蕉糸・木綿・蚕糸などの残糸を用いたもので、食を支えたのはイモとアワ、島の周りの「海の畑」ともいわれるイノ（礁池）から捕れる魚介類・海藻類などの海産物、ヤシガニ、カタツムリ、イノシン、オオタニワタリなどの自生野菜であつた。住は掘つ立て小屋の萱葺きであつた。だが、楽しみもあつた。それは、祭りであり、旧正月、十六日祭、十五夜などに出るごちそうであつた。生きとし生けるもののもつ意味が、ここにある。

下地島は、一九六二年に無人島となつて牧場の島となり、上地島は、一九七五年に小学校が廃校となつて寂れてい。島を活力あるものにするための手だてはないのか、との願いが胸に響く。「島じま編」は、引き続き、鳩間島・波照間島・西表島・黒島の順で刊行する計画を立てており、島のもつ「姿」をどのように描くか、読みたい。

（『八重山毎日新聞』二〇一四年三月二七日掲載）



戦後、マラリア撲滅などに尽力した八重山民政府衛生部（提供 新城知子）

終戦直後のマラリア撲滅

アジア・太平洋戦争が終結した一九四五年（昭和二〇）一〇月六日、八重山に米軍が進駐してきた。一二月二三日には南部琉球米国海軍政府最高執行官チエース少佐一行が軍政府施行のために来島した。随行した海軍軍医ルイス博士は、石垣町役所に医師を集めて、八重山の衛生状況について聴取した。同年二月二八日には米軍の指示で八重山支庁に衛生部（保健課、防疫課）が設置され、吉野高善が部長に就任。一二月三〇日には衛生部倉庫内に臨時マラリア診療所を設置し、吉野衛生部長が所長を兼任した。

一九四六年（同二一）には、アテブリンによって治療を受けた患者は延べ五九一〇人にのぼった。アテブリンの治療によってマラリア患者が目に見えて減少してきたので、一九四六年（同二一）二月、臨時マラリア診療が廃止され、衛生部に新たにマラリア防遏課（黒島直規課長）が配置された。同月、吉野高善の支庁長就任で後任の衛生部長になった大浜信賢は、マラリアの徹底的撲滅のために石垣島の蚊の種類、習性、頻度の調査に着手。一九四七年（同二二）四月までに分布調査を終えた。それをもとにマラリア防遏計画を立案した。そこで八重山議会にマラリア撲滅に関する取締規則案を上程、可決されて同年一〇月から実施された。

取締規則では、有病地域、無病地域が区分けされ、竹富村は西表島、小浜島、波照間島を有病地に指定した。また、各地に衛生部出張所が設置された。竹富、小浜、鳩間、大原、白浜、船浮、網取、浦内に出張所が設置され古見、上原、船浦に詰所が置かれた。有病地では住民に週二回のアテブリン予防薬などを行き、また無病地から有病地へ出入りする人たちにはアテブリンを給与した。

米軍政府の援助と行政的努力、全住民の協力によって展開された、マラリア撲滅運動は確実に奏功した。そして、一九四九年（同二四）にはマラリア患者は一四人と減少していった。

（通事孝作）

第三一回 竹富町史編集委員会を開催

三、その他

一、『竹富町史』第五巻「新城島」発刊の報告

第三一回竹富町史編集委員会が、平成二六年三月十四日午前

十時から、石垣港離島ターミナル会議室にて開催された。

出席者は編集委員十五人（欠席者三人）、事務局三人。

委員会開催に先立ち、竹富町教育委員会教育長・慶田盛安三から挨拶があり、「新城島編の発刊をみなさんとともに喜びたい。編集事業は多くの方の支援が必要。今後とも協力をお願いしたい」と述べた。

続いて登野原武委員長のあいさつがあり、「新城島編を刊行できたのも皆様のおかげ」と感謝の言葉を述べた後、健康上の理由で二月末日に委員の辞退届を提出した報告がなされ、その理解を呼びかけた。そして「町史編集事業を最後まで立派に遂行していただきたい」としめくづた。

その後、事務局より二〇一三年度の業務経過報告があり、ひ

き続き次の議題にそつて審議がなされた。

二、島じま編進捗状況の報告

黒島 全体的に滞っている。執筆分担や構成について再検討の必要がある（玻座真武 黒島編専門部会長）。

鳩間島 平成二六年度発刊に向けて、現在、版下制作中である。編集作業のなかで、計一回の専門部会を重ねたこと、「第一

新城島編専門部会委員の上江洲儀正氏より次のように報告がなされた。

『新城島』編が完成し、専門部会を中心とした約一〇年の取り組みを振り返ってみると、感慨深いものがあります。「第一章 人物」では多くの人を取り上げることができました。編集作業を通して記録を残し次世代につなぐ重要性を再確認しました。今後は『新城島』をどのように活用するかが課題かと思います。

事務局からは好評発売中であることが報告された。

議題 一、『竹富町史』第五巻「新城島」発刊の報告

二、島じま編進捗状況の報告

二章「言語」を新設したこと、内容について編集委員に専門的な立場から査定をお願いしたことなどがあった（吉川安一 鳩間島編専門部会長）。

波照間島 徐々に原稿が集まつてきている。しかし、構成に変更を要する箇所もみられる。また、人物調査票を関係者に配布したが反響がないことも気になつていて。執筆者については病気や体調を考慮して再検討しなければならない（玉城功一 波照間島編専門部会長）。

西表島 昨年度の編集委員会で分冊が決まつたので、編集計画、執筆者の見直しを急がなければならない。これまで仮に「伝統的集落編」「開拓集落編」として分けていたが、具体的なことについては、新しく越智正樹氏を専門部会に迎えて検討を進めた。大富集落について、開拓当時の状況がわかる新資料が見つかつたので、これを生かしたものにしたい（石垣金星 西表島編専門部会長）。

（一）「郷友会編」について

阿佐伊孫良氏から、島しま編の取り組みの際、「郷友会編」のことも視野に入れながら、資料の収集など取り組んでほしいとの要望があつた。石垣・沖縄・東京在の竹富島の郷友会を例に、時代とともに変化する状況が説明された。

その後、「郷友会編」をどのようなコンセプトでまとめるかが議論された。まず編集意義を明確に提示する必要がある。議論を通して、竹富町の独自性とアイデンティティをどのように意味づけるられるかが重要な課題であることが浮き彫りとなつた。

また、新本光孝委員から、石垣在小浜郷友会、在沖小浜郷友会の歴代会長の資料が提示された。

（二）「自然編」について

新本光孝部会長より全体の構成と取り組みについて提案があつた。西里喜行氏から、災害史という視点からの記述も必要ではないかとの提起があつた。

三、その他

編集委員会後に開かれた部会の申し合わせで、人と自然の関係や自然遺産の動向も視野に入れて取り組んではどうかとの意見があつた。

(三)「言語編」について

現在、八重山方言は絶滅が危惧される状況だが、竹富町史編集事業でも取り組む必要があるのではないかという提案があり、活発な議論となつた。話し合いのなかで、「言語はアイデンティティの証明である」(西里喜行氏)ことが共通に理解できたが、直面する課題として、島じま編で試行錯誤しながら、各島の自主性にまかせて記録に取り組むことが確認された。

また、体系的な記述と同時に音声の記録も重要であり、まず音声と表記についてのデータベース作成が急務である(石垣金星氏)。それには時間と体力が必要で、当委員会だけでは遂行できる事業ではないので、将来的には教育委員会のなかに委員会を設置して発展的に取り組める計画が必要である(三木健氏)。里井洋一氏より、台湾原住民の言語教材が紹介された。

(四) 新編集委員長に石垣久雄氏を選出

編集委員会発足から長年にわたり委員を務め、二〇〇五年からは委員長を勤められた登野原武氏が、健康上の理由から辞退届を提出された。それに伴つて互選により、新しい編集委員長として石垣久雄氏を選出した。

(五) 通事孝作係長 定年退職

一九九一年に嘱託職員として町史編集事業に携わつてからこれまで、町史編集の中心となつて事業を牽引してきた、町史編集係長、通事孝作氏が三月三一日付で定年退職を迎えた。

通事氏は、「約二〇年にわたり竹富町の歴史を編んできました。編集委員の先生方とともに取り組んだ仕事はたいへん有意義なものであると確信しています。今後も力のある限り町史編集事業に協力したい。まずは波照間島編をしつかり書き残したい」とあいさつを述べた。

今後何らかのかたちで町史編集編事業に通事氏の力を借りることができるよう、編集委員会から教育委員会に要請することが決定した。

業務日誌 二〇一三年度

◆ 二〇一三年 (平成二十五年)

を交わす。

- 五月 一日 『沖縄県地域史協議会会誌』三十六号に原稿提出。
五月 八日 編集委員・三木健氏、炭坑資料についてテレビ取材を受ける（於・町史編集室）。
- 五月 九日 竹富町社会福祉協議会監査（於・町史編集室→十日）。
- 五月 三一日 二〇一三年度地域史協議会（於・南風原中央公民館）に出席。
- 六月 十二日 西表島白浜海神祭取材・撮影。職員一人出張。
- 六月 十七日 第五回鳩間島編専門部会開催。
- 六月 二七日 沖縄県立博物館新城島調査に同行。
- 七月 十六日 西表島編専門部会委員・永岡久美子氏が委員を辞任。
- 七月 二〇日 鳩間島豊年祭取材・撮影。
- 七月 二三日 越智正樹氏に西表島編専門部会委員委嘱。
- 七月 二八日 黒島豊年祭取材・撮影。
- 八月 八日 竹富町教育委員会リーダー研修会にて、職員が「島の暮らしと水」をテーマに講話（於・商工会ホール）。
- 八月 十四日 第六回鳩間島編専門部会開催。
- 八月 十六日 第七回西表島編専門部会開催。
- 八月 二一日 吉川英治氏に鳩間島編専門部会委員を委嘱。
- 九月 五日 登野原武、石垣繁両氏により『竹富町史』第五卷『新城島』の方言表記の統一作業。
- 四月 一日 南山舎、山田書店、村中書店、Booksじのん、榕樹書林、沖縄教販、喜宝院蒐集館、N.P.O.たきどうんと「竹富町刊行物販売委託契約」
- 二月 二二日 第三〇回竹富町史編集委員会開催。
- 二月 二三日 『八重山毎日新聞』に記事「竹富町史編集委員会島しま編の進ちよく確認 第五巻『新城島』五月に発刊」掲載。『八重山日報』に記事「竹富町史編集委員十八人に委嘱状交付 新城、鳩間編発行へ」掲載。
- 二月 二六日 南山舎と『竹富町史 第五巻 新城島』版下制作請負契約を交わす。
- 三月 八日 全国やいまびとう大会「写真展」の最終会議（八重山広域圏事務所）。
- 三月 二六日 竹富町観光VTR（竹富町観光振興用動画ナビ整備事業）試作会（於・役場二階委員会室）。一人派遣。
- 三月 二八日 『竹富町史だより』第三十四号八島印刷より二三〇〇部納品。

九月 七日 竹富町観光VTR（竹富町観光振興用動画ナビ
整備事業）シナリオ校正原稿提出。

九月十二日 登野原武氏、安里碩八氏、石垣繁氏により『竹
富町史 第五巻 新城島』の方言表記の統一作業。

九月二十四日 波照間島編原稿提出締め切り。

九月二七日 第七回波照間島編専門部会開催。

十月 一日 美崎運輸倉庫所蔵の「官報」（マイクロ本）を石
垣市史編集室に移動（貸し出し）。

十月二一日 鳩間島編の原稿について、編集委員会に査定を
依頼。

十月二七日 第七回鳩間島編専門部会開催。

十月三一日 加治工尚子氏に鳩間島編の原稿「鳩間島の伝承
話」依頼。

一一月十一日 『竹富町史 第五巻 新城島』印刷製本の入札
(於・離島ターミナル会議室)。

大塚勝久氏、近代産業遺産写真展「宇多良炭坑」
第五巻「新城島」印刷製本請負契約を交わす。

大塚勝久氏、近代産業遺産写真展「宇多良炭坑」
写真寄贈記者会見（町史編集係が資料作成）。

鳩間島編について、鳩間島公民館長・通事建次
氏宛に、「歴代部落会長・公民館長及び任期と
各御嶽の神司及びティジリビーについて（協力
願い）」を依頼。

一一月二〇日 竹富島種子取祭取材・見学。

一一月二二日 竹富町外部評価ヒアリングを受ける。

◆ 二〇一四年（平成二六年）

一一月 九日 『竹富町史 第五巻 新城島』発刊記者会見。

一一月 十日 『八重山毎日新聞』に記事「竹富町史編集委
一〇年の歳月かけ・・・『新城島編』を発刊」
掲載。

一一月十二日 『琉球新報』に記事「竹富町史『新城島』刊
行－パナリ焼やジュゴン詳述－」掲載。

一一月十三日 『沖縄タイムス』に記事「竹富町史『新城島』
刊行－パナリ焼・ジュゴン手厚く－」掲載。

一一月二一日 西表東部パナリ郷友会と『竹富町史 第五巻
新城島』五〇冊の売買契約を交わす。

一一月二二日 南山舎と『竹富町史 第六巻 鳩間島』版下制
作請負契約を交わす。

川平成雄、得能壽美、赤嶺政信、波照間永吉、石川久美子、仲原靖夫、安里英子七氏に『竹富町史 第五卷 新城島』の書評依頼。

一月三一日 黒島旧正月行事取材・撮影（北神山御嶽祈願、東筋大綱引）。

二月 八日 第二回竹富町やまねこマラソン大会。

二月 九日 第九回鳩間島編専門部会開催。

二月十二日 登野原武氏より「町史編集委員辞退届」事務局

受理。

二月十三日 仲原靖夫氏より書評『竹富町史 第五卷 新城島』発刊によせて 受理。

二月十四日 竹富町・文化庁発行「ぱいぬ島の風と水の物語」（平成二五年度文化遺産を活かした観光振興地域活性化事業）ゲラ校正提出。

二月十七日 石垣在新城郷友会と『竹富町史 第五卷 新城島』三〇冊の売買契約を交わす。

二月二七日 安里英子氏より書評『竹富町史 第五卷 新城島』受領。

三月 三日 沖縄ケーブルネットの番組「あまくま歩人」のなかの「あまくまブックレビュー」のコーナーで、『竹富町史 第五卷 新城島』が、宮城一春氏により紹介される。

三月十三日 第十回鳩間島編専門部会開催。

三月十四日 第三回竹富町史編集委員会開催。

三月二三日 「北と南の仮面能公演」取材・撮影（於・中野わいわいホール）。

三月二八日 編集委員会から通事孝作係長に、定年退職に際し、これまでの功績を讃えると同時に感謝の意を表し「感謝状」を贈呈する。

三月二九日 『八重山毎日新聞』に川平成雄氏の書評『竹富町史 第五卷 新城島』が語りかけるもの、「八重山日報」に得能壽美氏の書評「文化による島興し―『竹富町史 第五卷 新城島』の編集・

発行によせて―」掲載。

三月三十日 第十一回鳩間島専門部会開催。

三月三十一日 第十一回鳩間島専門部会開催。

第三回竹富町史編集委員会開催。

仲盛の遠見台

西表島東部と黒島の間に新城島がある。島は北の上地島と南の下地島からなり、ふたつで通称パナリと呼ばれる。下地島は面積一・五八平方キロメートルの大きさを抱え、最高標高一〇・四メートルの墮円形で、第四紀更新世の琉球石灰岩でできた低島である。仲盛の遠見台は下地島にある。

遠見台および烽火台について、『富川親方八重山島諸村公事帳』(一八七五年(光緒元))によると、(前略)一、御当地之船ヨリ唐船漂着之時立火弐ツ、一、大和船漂着之時立火三ツ。一、遠外国船漂着之時四ツ。右三行之通昼夜立火可仕候間、昼者煙ヲ以通達可致事。つまり、船が漂着したら、唐船は二つ、大和船は三つ、外国船は四つ立火を上げて、それをつないで藏元まで伝えることとなる。ただ、立火の数が琉球の正史『球陽』と異なる。

仲盛は島の中央よりや西方に位置する。現在、島のすべてが牧場化されていて周囲を見わたすと一瞬、大陸にいるような錯覚を受けてしまう。今ではその面影はないが、かつてはヤヂー道が通っていた。道のそばにある遠見台は基底部分の直径約七メートル、高さ三・二~三・五メートル、上面の直径約三~三・八メートルの三層からなる。かつて登るときは遠見台の渦巻きを利用せずに、隣接する屋敷跡の石垣から遠見台に設置された階段を登つていた。

遠見台は、西表島の南西および南の方々への眺望は良好である。また、波照間への見通しが良く、あるいは立火は波照間からの火を受けたことに起因するのだろうか。遠見台は別名、波照間ムリとも呼ばれている。

(通事孝作)



下地島の中央にある仲盛の遠見台

平成25年度受贈図書一覧

多数の個人、関係機関等からの御寄贈、誠にありがとうございます。

受贈図書（発行年・編著者）	寄贈者芳名
アジア遊学 一特集 沖縄文化の創造— No.53 (2003年、勉誠出版)	通事孝作
石垣市史叢書19 球陽 八重山関係記事集 上巻 (2013年、石垣市教育委員会市史編集課)	石垣市教育委員会市史編集課
糸満市史 資料編13 村落資料 一旧高嶺村編一、同 CD-ROM 版 (2013年、糸満市史編集委員会編)	糸満市役所
西表島研究 東海大学沖縄地域研究センター所報2010 (2011年、東海大学沖縄地域研究センター所)	東海大学沖縄地域研究センター所
西表島研究 東海大学沖縄地域研究センター所報2011 (2012年、東海大学沖縄地域研究センター所)	東海大学沖縄地域研究センター所
西表島の植物誌 (2010年、林野庁九州森林管理局 西表森林環境保全ふれあいセンター)	新本光孝、林野庁九州森林管理局 西表森林環境保全ふれあいセンター
西表島の民謡 (2013年、西表文化祭実行委員会・西表島エコツーリズム)	石垣金星
浦添市移民史 ビジュアル版その2 アジア太平洋・国内編 もうひとつのウラシーンチたちの体験 一渡航・戦争・戦後一 (2013年、浦添市立図書館)	浦添市教育委員会
うるま 漢詩ロード散策 No.1 (2013年、うるま市立中央図書館、うるま市史編さん室)	うるま市立中央図書館、うるま市史編さん室
大浜の民話2—石垣市研究資料6— (2013年、石垣市教育委員会市史編集課)	石垣市教育委員会市史編集課
沖縄 今この時 (1972年、屋良朝苗)	飯田泰彦
沖縄県公文書館研究紀要 第15号 (2013年、沖縄県公文書館)	沖縄県公文書館
沖縄県公文書館だより ARCHIVES 第44号 (2013年、沖縄県公文書館)	沖縄県公文書館
沖縄県地域史協議会会誌 第36号 (2013年、沖縄県地域史協議会編)	沖縄県地域史協議会
沖縄県平和祈念資料館だより No.24 (2013年、沖縄県平和祈念資料館)	沖縄県平和祈念資料館
沖縄県平和祈念資料館だより No.25 (2013年、沖縄県平和祈念資料館)	沖縄県平和祈念資料館
沖縄史料編集紀要 第36号 (2013年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育委員会
沖縄の帝王 高等弁務官 (1996年、大田昌秀)	通事孝作
沖縄文化研究 39 (2013年、法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所
感想文集 ひめゆり 第23号 (2012年、ひめゆり平和祈念資料館)	ひめゆり平和祈念資料館
感想文集 ひめゆり 第24号 (2013年、ひめゆり平和祈念資料館)	ひめゆり平和祈念資料館
久米島まるごと歴史教材 沖縄県離島の高等学校における日本史学習プログラム—久米島編— 地理歴史人類学研究報告 No.1 (2013年、琉球大学法文学部人間科学地理歴史人類専攻過程編)	山里純一

現代史を学ぶ (1995年、渕内謙)	通事孝作
小浜島の近現代の人物略伝—明治・大正・昭和に生きる— (2012年、新本光孝)	新本光孝
古見方言の基礎語彙〔『沖縄芸術の科学』第10号別刷〕(1998年、加治工真市)	加治工真市
古見方言の基礎語彙〔『沖縄芸術の科学』第13号別刷〕(2001年、加治工真市)	加治工真市
古琉球 (2000年、伊波普猷〈外間守善校訂〉)	通事孝作
従軍慰安婦〈正篇〉[第1版第15刷] (1992年、千田夏光)	通事孝作
首里城研究 No.15 (2013年、首里城研究会編)	首里城公園友の会
首里城公園管理センター調査研究・普及啓発事業年報 No.3 (平成23年度号) (2013年、池田孝之編)	一般財団法人沖縄美ら島 財団首里城公園管理部
食文化誌 ヴェスター 一かまどの女神— No.90 (2013年、江頭宏昌責任編集)	林史樹
植民地統治期台湾から石垣島名蔵・嵩田地区への移動について—石垣町役場作成の寄留簿の分析を通じて—〔『沖縄移民研究センター 移民研究 第9号』抜刷〕(2013年、松田良孝)	松田良孝
知床の高山植物〔第2版〕 (2013年、内田暁友)	知床博物館協力会
続古見方言の基礎語彙 (2) [『琉球の方言 37』抜刷] (2013年、加治工真市)	加治工真市
東海大学学園史ニュース 一建学70周年記念講演会記録— 特別号 (2013年、東海大学学園史資料センター)	東海大学学園史資料センター
東海大学資料叢書3 財団法人国防理工学園関係認可申請書類 (2013年、東海大学学園史資料センター)	東海大学学園史資料センター
豊原入植60周年〈冊子〉 (2013年、豊原入植60周年記念実行委員会)	豊原入植60周年記念実行委員会
名護市史叢書18 海外のナグンチュ ー第5回『世界のウチナーンチュ大会』関連特別展ブックレットー (2013年、名護市教育委員会文化課市史編さん係編)	名護市教育委員会
西原の神・人・自然ー第17回講演とシンポジウムー (2010年、宮古島の神と森を考える会・西原自治会)	石垣繁
日本の歴史 上 [第7刷] (1965年、井上清)	通事孝作
波照間方言動詞の活用〔『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術工芸一』(沖縄県立博物館) 抜刷〕 (1998年、加治工真市)	加治工真市
鳩間節考〔八重山文化論叢別刷〕(加治工真市)	加治工真市
羽ばたけ子らよ！—仲盛治の足跡— (2013年、仲盛康治編著)	仲盛康治
ひめゆり平和祈念資料館資料館だより 第48号(2012年、ひめゆり平和祈念資料館)	ひめゆり平和祈念資料館
ひめゆり平和祈念資料館資料館だより 第49号(2012年、ひめゆり平和祈念資料館)	ひめゆり平和祈念資料館
ひめゆり平和祈念資料館資料館だより 第50号(2012年、ひめゆり平和祈念資料館)	ひめゆり平和祈念資料館
ひめゆり平和祈念資料館資料館だより 第51号(2013年、ひめゆり平和祈念資料館)	ひめゆり平和祈念資料館
ひめゆり平和祈念資料館 2011年度 年報 第23号(2012年、ひめゆり平和祈念資料館)	ひめゆり平和祈念資料館
ひめゆり平和祈念資料館 2012年度 年報 第24号(2013年、ひめゆり平和祈念資料館)	ひめゆり平和祈念資料館

プロセスとしての〈共同体〉—沖縄・波照間島の「戦争マラリア」をめぐる語りを事例に—『東洋文化No.93抜刷』(2012年・加賀谷真梨)	加賀谷真梨
ベルリン国立民族学博物館所蔵 琉球・沖縄染織資料調査報告書 〈資料編・図版編〉(2013年、祝嶺恭子)	沖縄美ら島財団
法政大学沖縄文化研究所所報 第72号 (2013年、法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所
法政大学沖縄文化研究所所報 第73号 (2013年、法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所
宮古島市史資料4 郷土誌 (2012年、宮古島市教育委員会生涯学習振興課編)	宮古島市教育委員会
八重山方言概説〔講座方言学10 沖縄・奄美の方言別刷〕(1984年、加治工真市)	加治工真市
与那国台湾往来記—「国境」に暮らす人々— やいま文庫14 (2013年、松田良孝)	松田良孝
与那国町史第三巻 歴史編 与那国島—黒潮の衝撃波 西の国境 どうなんの足跡—	与那国町史編纂委員会
与那原町史だより 第5号 (2013年、与那原町教育委員会生涯学習振興課町史編纂室)	与那原町教育委員会生涯学習振興課町史編纂室
与那原の沖縄戦 証言集 (2013年、与那原町史編集委員会編)	与那原町教育委員会
立法院発足前の八重山群島〔沖縄県議会史 第二巻 通史編2〕(2013年、石垣繁)	石垣繁
琉球大学附属図書館報 びぶりお 158[vol. 46 No.1] (2013年、びぶりお編集委員会)	琉球大学附属図書館
琉球大学附属図書館報 びぶりお 159[vol. 46 No.2] (2013年、びぶりお編集委員会)	琉球大学附属図書館
琉球・竹富島方言の基礎語彙 一分野1、天地、気候の部— 〔『琉球の方言』21号抜刷〕(1996年、加治工真市)	加治工真市
琉球・竹富島方言の基礎語彙 一分野2、動物— 〔『琉球の方言』22号抜刷〕(1998年、加治工真市)	加治工真市
琉球・竹富島方言の基礎語彙 一分野3、植物— 〔『琉球の方言』23号抜刷〕(1999年、加治工真市)	加治工真市
竹富方言の基礎語彙 一分野5、衣— 〔『琉球の方言』23号抜刷〕(2001年、加治工真市)	加治工真市
竹富方言の基礎語彙 一分野6、食—、一分野7、住居— 〔『琉球の方言』26号抜刷〕(2002年、加治工真市)	加治工真市
竹富方言の基礎語彙 一分野8、民俗—、一分野9、遊戯— 〔『琉球の方言』26号抜刷〕(2002年、加治工真市)	加治工真市
琉球の方言 37 (2013年、法政大学沖縄文化研究所)	加治工真市
琉球方言への誘い—琉球方言の地域性—〔平成9年度 沖縄地区大学放送公開講座 南島文化への誘い』抜刷〕(1997年、加治工真市)	加治工真市
歴代宝案の栄 (2003年、沖縄県教育委員会)〔日本語版〕〔中国語版〕〔英語版〕	沖縄県公文書館
私の歩んだ道 水道と共に四十六年 (2006年・金城義信)	飯田泰彦

竹富町史の刊行物

1.『竹富町史』別巻2 竹富町関係文献目録 1990年度（平成2） 関係機関へ配付

竹富町関係の文献資料の標題、内容、所蔵機関等を各島ごとにまとめた調査研究のための手引き書。日本十進分類法(NDC)に準じて、一般、哲学・宗教、歴史、社会科学(社会科学一般、行政、教育)、自然科学(自然科学一般、地理・地質、海洋・気象、植物、動物一般、鳥類、医学・衛生)、工学・工業、産業(産業一般、開発・土地問題)、芸術、言語、文学に分類して文献の発行日順に編集、末尾には所蔵機関を明記してある。B5版 ソフトカバー簡易製本117頁。

2.『竹富町史』別巻3 写真集 ぱいぬしまじま 1992年（平成4） 本体2,500円十税

明治時代中後期から現代に至るまでの島々の実相を、各島ごとに村落・自然、産業・交通、教育・文化・スポーツ、暮らし・戦争、祭祀・芸能の各項目に分類して写真で表現した資料集。924枚の写真を用い、各島ごとに、一言で島を知る題名を標題に付け、島の“顔”を呈示する。モノクロ写真を主体に編集しているが、巻頭にはカラー写真を用い、竹富町の“今”をアピールしている。写真から古き良き時代の島々を偲ぶことができる。A4版 糸かがり上製本 319頁。

3.『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成 I 1993年度（平成5） 本体2,000円十税

1898年（明治31）から1918年（大正7）までの間、沖縄本島で発行された新聞の記事を集めた資料集。収録した新聞は、県内で最初に発行された、「琉球新報」（明治26年創刊）、「沖縄毎日新聞」（明治41年創刊）の二紙。「明治・大正期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、文化等の記事を古い順に配列して編集した。県紙であるため、八重山関係の記事は少ないが、それでも西表炭坑や八重山の地誌等の記事は特筆に値する。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 684頁。

4.『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成 II 1994年度（平成6） 本体2,000円十税

1917年（大正6）7月から1933年（昭和8）12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集めた資料集。取り扱った新聞は「先島新聞」（大正6年7月～同15年8月）、「八重山新報」（大正10年2月～昭和8年12月）、「先島朝日新聞」（昭和3年5月～同8年12月）、「八重山民報」（昭和7年1月～同8年12月）の四紙。「大正・昭和戦前期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は村勢、マラリア問題、村の行財政、選挙等が注目され、往時の竹富村を浮き彫りにしている。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 724頁。

5.『竹富町史』第十二巻資料編 戦争体験記録 1995年度（平成7） 本体3,000円十税

アジア太平洋戦争中の町内の世帯別戦災実態調査、全戦没者数、戦争体験記及び沖縄戦、八重山の戦争をまとめた資料集。各島、各集落ごとに詳細な戦災調査を行い、町内における戦争の実態を明らかにしている。特筆すべきは戦時中の集落地図を作製するとともに、さらに集落ごとに各家族単位の戦争被害を具に図表にしてあること。この資料集から戦争マラリア等の惨事を浮かび上がらせ、戦争がいかに悲惨だったかが分かる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 1,190頁。

6.『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成 III 1996年度（平成8） 本体2,000円十税

1934年（昭和9）2月から1945年（同20）3月までの間、八重山と沖縄本島で発行された新聞の記事を集めた資料集。取り扱った新聞は「八重山新報」（昭和9年2月）、「先島朝日新聞」（昭和9年1月～同15年8月）、「八重山民報」（昭和9年1月～同11年6月）、「海南時報」（昭和10年8月～同20年3月）、「沖縄日報」（昭和11年11月～同15年10月）、「琉球新報」（昭和13年2月～同15年11月）六紙。

「昭和戦前期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料に盛り込まれた記事は多岐にわたるが、当時の世相を反映し、戦時色の濃い記事が目立つ。それでも記者の島を訪ねてのルポルタージュ記事は、往時の島の一面を垣間見せる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 720頁。

7.『竹富町制施行50周年記念誌』ぱいぬしまじま50 1998年度（平成10） 本体2,500円十税

1948年（昭和23）の町制施行から1998年（平成10）までの竹富町の50年の足跡を写真、年表等で集成した記念誌。本誌は、島びとの暮らしや学校の様子、祭りなどがモノクロ写真を使用して編集され、その年の人口も掲載し、資料的な価値を持たせるように工夫してある。歴史年表は行政に限らず、婦人会、青年会等の動向も扱い可能な限り詳細に、年別の事項を入れてある。また、姉妹町である北海道の斜里町との親善交流の歩みも盛り込まれている。歴代町長、歴代議會議長、町議會議員、各課課長の顔写真、職員の集合写真、竹富町振興目録も掲載してある。A4版 糸かがり上製本 247頁。

8.『竹富町史』資料集① 鉄田義司日記 1999年（平成11） 本体1,500円+税

和歌山県久度山町出身の陸軍少尉（後に中尉・大尉）鉄田義司が残した戦時に書き残した個人的な陣中日記。彼は1941年（昭和16）、内離島に司令部を置く船浮要塞に赴任したが、その後所属する大隊が石垣島に移転したため、石垣島に移った。日記には赴任の時から要塞での軍事訓練や、石垣島に移駐後に米軍機から初空襲を受けた時の様子、さらに1945年（昭和20）、敗戦後の復員までに至る経過を記す。八重山の戦争を知る同時代資料として価値を有する。A5版 ソフトカバー簡易製本 519頁。

9.『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成IV 2000年度（平成12） 本体2,000円+税

1947年（昭和22）1月から1955年（同30）12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集めた資料集。取り扱った新聞は、「海南時報」（昭和22年1月～同30年12月）、「八重山タイムス」（昭和22年1月～同30年12月）、「南西新報」（昭和22年9月～同28年10月）、「自由民報」（昭和23年7月～同29年1月）、「南琉日日新聞」（後に「八重山毎日新聞」と改題、昭和25年3月～同30年12月）、「八重山新報」（昭和30年4月～同10月）の六紙。「昭和戦後期①の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は、終戦直後の島々の様子を綴っているが、当時の新聞が一種の「政論新聞」だったこともあり、選挙に関する記事には政治色が濃厚に出ている。それでも紙面から島びとの暮らしを窺い知ることができる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 842頁。

10.『竹富町史』第十巻資料編 近代2 2001年度（平成13） 本体2,500円+税

南嶋民俗資料館（石垣市字大川）が所蔵する崎原文書「必要書」、琉球大学附属図書館（西原町千原）が所蔵する宮良殿内文書「必要書類集」を集成した近代文書の資料集編。「必要書」は、崎原當貴が残した文書。當貴は1897年（明治30）に崎山村頭に任じられている。この文書は一種の備忘録で、日記の形式をとる。中でも「人々ヨリ到来物控」は、贈答品のやりとりがあり、往時の村びとの暮らしぶりが躍然ながら分かる。「必要書類集」は宮良殿内の直系である宮良當整が残した文書である。標題に「明治二十五年以降」とあるが、1896年（明治29）から1907年（同40）までの間の行政文書となっている。當整は白保村頭、新城村頭、竹富村頭を務めたが、行政文書は八重山島序との往復文書、農業統計資料を中心である。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 348頁。

11.『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成V 2002年度（平成14） 本体2,000円+税

1956年（昭和31）1月から1960年（同35）12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集めめた資料集。取り扱った新聞は「海南時報」（昭和31年1月～同34年4月）、「八重山タイムス」（昭和31年1月～同35年12月）、「八重山毎日新聞」（昭和31年1月～同35年12月）、「八重山新報」（昭和31年1月～同33年3月）の四紙。「昭和戦後期②の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は、多岐にわたるが、西表島開発問題をめぐる様々な調査、早稲田大学八重山学術調査団に関する記事等は歴史の一齣として特筆される。なかでも、町長選挙等を巡る記事は、当時の政治の季節を反映し、激しい紙面づくりを展開している。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 843頁。

12.『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成VI 2003年度（平成15） 本体2,000円+税

1961年（昭和36）1月から1964年（同39）7月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集めめた資料集。取り扱った新聞は「八重山タイムス」（昭和36年1月～同39年7月）、「八重山毎日新聞」（昭和36年1月～同39年7月）、「八重山朝日新聞」（昭和37年1月～同39年7月）の三紙。「昭和戦後期③の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。収録された記事は、各新聞社によって特色があるが、総じて西表開発問題、町有地処分問題と新庁舎建設、八重山市町村合併と町役場移転問題、西表島での米軍事演習、大干ばつ、西表島での中学校統合問題、一年に二度の町長選挙等の記事がクローズアップされる。記事の中には現在に結びつくものもある。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 947頁。

13.『竹富町史』第十巻資料編 近代1 2004年度（平成16） 本体2,500円+税

竹富島喜宝院蒐集館が所蔵する明治30年代の文書を「近代1」として集成した近代文書の資料編。収録した史料は「村日記－明治37年以降」、「間切島会二関スル書類－自明治31年 至全37年・自明治37年 至」、「報告綴－明治37年」、「人頭税領収証綴－自明治31年 至明治35年」、「契約及金銭物品二関スル諸証書－自明治31年 至全36年」の五点。喜宝院蒐集館にはこのほか、数多くの民俗資料等があるが、これら的一部は写真に収め、口絵として扱った。史料から人頭税施行末期及び廃止直後の島の様子を知ることができる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 546頁。

14.『竹富町史』第十巻資料編 近代3 2005年度（平成17） 本体2,500円+税

琉球大学附属図書館が所蔵する宮良殿内文書のひとつ。明治30年代初中期の宮良當整日記を「新

城村頭の日誌』の副題を付け、「近代3」として集成した近代文書の資料編。宮良當整は1897年（明治30）から1903年（同36）まで新城村頭を勤めた。収録資料は新城村頭時代に書き残した「明治三十三年 日誌 宮良記」「自明治三十四年丑年旧正月 至全十二月 日誌 宮良當整」と表題の付された近代文書。文字中心の資料編だが、ビジュアル感覚を少しでも取り入れることを基本に、新城島にかかる写真を口絵として配した。史料は當整の私的な日誌だが、明治期の新城島の人々の暮らしなどを窺知できる。A5版 紙かがり上製本 ケース入り 600頁。

15. 『竹富町史』第十巻資料編 近代4 2006年度(平成18) 本体2,500円+税

沖縄県地域史協議会がマイクロフィルムより複製した明治・大正・昭和戦前期の沖縄県に関する『官報』の記事の中から、八重山関係の記事を検索して収録した資料編。副題に「官報にみる八重山」を付した。『官報』は1883年（明治16）7月2日に創刊され、以後、日刊紙として発行されている。記事は、国会・内閣・裁判所等で決定した事項を国民に知らせる広報紙および民間にわたる広告紙としての性格を有しているとはいえ、行政上の歴史的事実を知るうえで充分な資料的価値がある。記事の中には、人頭税の廃止を裏付ける法律の施行、鉱業権に基づき申請する石炭等の鉱物の試掘・採掘願いの記事もある。「新聞集成」と合わせて利用すると、近代八重山の一侧面が浮かび上がってくる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 659頁。

16. 『竹富町史』 第十巻資料編 近代5 2008・2009年度(平成20・21) 東体2,500円+税

波照間公民館が原本(所在不明)を所蔵していたと思われ、財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室が複製本を所蔵する「島庁通達綴」(明治三十五年一月～至三十七年十二月)、「波照間村事務所」、「波照間島番所日記」(明治二十八年～二十九年)、それに波照間小学校が保管する「波照間小学校沿革誌(第壹部)」の三資料を、「波照間島近代資料集」の副題を付け「近代5」として集成した近代文書の資料編。「島庁通達綴」が送付された時代は人頭税が幕を閉じ、日露戦争が勃発して日本が帝国主義を歩み始める時期にあたる。資料には日露戦争にかかる通達等もある。また、標題がないため仮に付したであろう「波照間島番所日記」は1895年(明治28)～1896年(同29)までの村番所の動向を日記スタイルで書き止めたもので、島の人物が数多く登場し、祭祀も載っており貴重なものである。「波照間小学校沿革誌」は、1894年(明治27)～1948年(昭和23)までの学校の沿革を「第壹部」としてまとめられている。学校の生徒数、人事異動、記念日などが記され、太平洋戦争なると強制疎開のことなどが記されている。A5版 糸かぎり上製本 ケース入り 434頁。

17. 『竹富町史』第二巻 竹富島 2011年度（平成23） 条件3,000円+税

『竹富町史』の第一弾を飾る島々編の史誌である。第二巻「竹富島」には、序章「うつぐみの島」、第1章「集落と自然」、第2章「歴史と伝承」、第3章「教育」、第4章「人と暮らし」、第5章「信仰と祭祀」、第6章「人の一生」、第7章「言語伝承」、第8章「竹富島の芸能」、第9章「人物」、第10章「歴史年表」、終章「竹富島の過去・現在・未来」が盛り込まれている。巻頭には島の伝統芸能である、種子取祭などの写真が掲載され、視覚に訴える編集方法が取られている。同史誌は自然、歴史、文化、民俗、暮らし、言語、人物などを、できるだけ網羅するように配慮した。B5版 糸かがり上製本 700頁。

18. 「竹富町史」第三巻 小瀬島 2011年度（平成23） 杰体3,000円+税

『竹富町史』第二巻「小浜島」 2011年度（平成23） 本体3,000円+税
『竹富町史』島々編の史誌である。第三巻「小浜島」には、序章「かふみぬ島 小浜」、第1章「島の概況」、第2章「自然」、第3章「歴史と伝承」、第4章「教育」、第5章「人と暮らし」、第6章「信仰と祭祀」、第7章「人の一生」など14章が盛り込まれている。そして、終章「ちゅらさんの島 小浜」で締めくくる。同史誌は自然、歴史、文化、民俗、暮らし、言語、人物などを、できるだけ網羅するように配慮している。B5版、系かがり上製本、678頁。

19.『竹富町史』第五卷 新城島 2013年度（平成25） 杰体3,000冊

『竹富町史』第五巻「新城島」 2013年度(平成25) 本体3,000円+税
『竹富町史』島々編の史誌である。第五巻「新城島」には、序章「バナリ焼の里とザンの島」、第1章「島の概況」、第2章「自然」、第3章「歴史と伝承」、第4章「バナリ焼とザン」、第5章「教育」、第6章「人と暮らし」、第7章「信仰と祭祀」、第8章「人生儀礼」、第9章「民間伝承」、第10章「交通・通信・情報」、第11章「保健・衛生」、第12章「伝統文化」、第13章「人物」、第14章「歴史年表」、を盛り込み、そして、終章「リトルオアシスの新城島」で締めくくる。同史誌は自然、歴史、文化、民俗、暮らし、言語、人物などを、できるだけ網羅するように配慮している。B5版 紙かがり上製本 710頁

※ 竹富町史の刊行物は、石垣市・那覇市・宜野湾市の主な委託販売契約店での販売を行っております。詳細については、竹富町教育委員会総務課町史編集係（電話0980-88-7220）までお問い合わせください。

編集後記

『竹富町史だより』第三五号を発刊することができました。本号は『竹富町史 第五巻 新城島』の発刊に際して、書評を特集しました。このたびの書き下ろし三本、ブログや地元紙で既に掲載されたもの四本を一堂に集めてみました。評者の立場や関心によつてさまざまな読み方がされるものだとつくづく思いました。今後 波照間永吉氏（沖縄県立芸術大学教授）の書評が『沖縄タイムス』に掲載予定です。お楽しみに。

現在、「鳩間島」を編集中です。どの島も基本的な構成は同じですが、それでも島」との個性が際立つところに、竹富町の独自性と「島じま編」編集の面白さがあります。そして、「通史編」で竹富町の全体像を浮き上がらせようという構想を自論んでいます。

この基本構想にもとづき、長年にわたり町史編集に精励されてこられた、登野原武委員長、通事孝作係長が今年度で勇退されます。編集事業の礎をつくっていただきましたことに感謝申し上げます。私たちはその志と英知、また方法論をしつかり引き継いでいきたいのです。今後ともご指導よろしくお願ひいたします。

（飯田泰彦）



平成26年3月31日発行

竹富町史だより

第35号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11番地1

☎ 0980-82-6191